



田中絹代ぶんか館開館記念シンポジウム  
「近代建築物の意匠に見る生活文化の変遷」  
基調講演

2010年2月14日

## 下関市の近代建築物の魅力とその歴史 —— 旧市庁舎第一別館と銀行の建物を中心に

日本銀行下関支店長 岩下直行

### 1. はじめに

昨日2月13日に、下関市立近代先人顕彰館、「田中絹代ぶんか館」が開館の日を迎えました。私も先週、完成前にちょっとだけ中に入れてもらい、展示を見せて頂きましたが、とても魅力的な展示物に感心しました。ただし、本日のシンポジウムは、展示物の内容についてではなく、その展示物を入れてある器、「旧市庁舎第一別館」の建物の魅力について、様々な話題を提供することを目的としたものです。以下では、この建物そのものを指し示す言葉として、「旧第一別館」を用いることにします。

私自身は、近代建築物の意匠に関する専門家でもありませんし、下関の歴史風物に関しても、こちらへ転勤してきて8ヶ月の新参者です。旧第一別館に何らかのかかわりがあるとすれば、この8ヶ月間、ほぼ毎日、その横を歩いて通勤していたということくらいです。しかし、そんな一通行人の目からも、旧第一別館は、周囲の街並みや自然環境とマッチした、とても素敵な建物に見えました。たまたま、本日のシンポジウムの導入役を仰せつかりましたので、私が普段、旧第一別館をどのように楽しんでいるのかについて、個人的な印象や思いから、自然風物、歴史や経済にいたるまで、幅広く話題を紹介し、皆様が田中絹代ぶんか館を訪問される際に、少しでも参考にし

て頂ければと考えています。その上で、後段のシンポジウムには建築を専門とする先生方にご登壇頂きますので、建築の意匠や歴史的背景を巡る、より掘り下げた議論をして頂きたいと考えています。

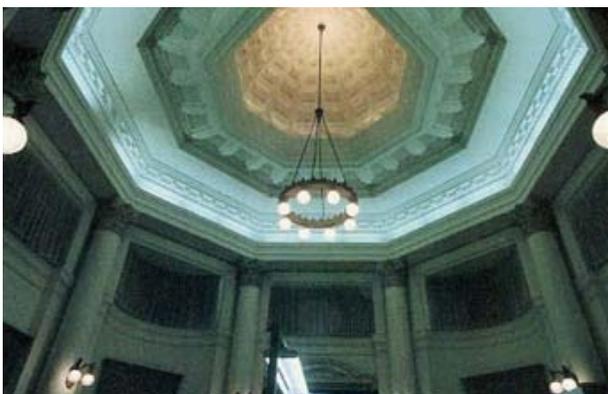
### 2. 個人的な経験：重要文化財のオフィスで過ごした日々

最初に、この旧第一別館の建物の話を離れて、私がなぜ、近代建築物に興味を持っているかについて、過去の個人的な経験をお話したいと思います。私は日本銀行に勤めて26年になりますが、そのほとんどを東京・日本橋にある日銀本店で過ごしました。特に、1994年から3年間は、この日銀本店旧館の丸いドーム屋根の下の大部屋が、私が勤務するオフィスだったのです。



日本銀行本店・旧館（東京都中央区日本橋本石町）

1896年に建てられた国の重要文化財、日銀本店の旧館は、伊藤博文公の千円札の裏面に描かれていましたから、ご記憶の方も多いことでしょう。この建物中央部、かつて役員室であった八角形の大部屋は、天井は豪華な装飾が施され、床は赤い絨毯が敷かれた古風なオフィスでした。天井が高く、冬は寒く、決して快適なオフィスとはいえませんでした。この文化財の建物の中で過ごした日々を、私は今でも鮮明に覚えています。当時、私は、そうした古い建物の中で、インターネットや電子マネーといった最先端の情報技術を研究していました。文化財の建物には穴があげられないので、インターネットのケーブルを引くのにちょっと苦労しましたが、落ち着いて考え事するにはなかなか良い環境で、充実した研究生活を送ることができました。



日本銀行本店・旧館のドーム屋根の真下、八角部屋の天井

山口県にも、本日のシンポジウムのテーマである旧第一別館をはじめとして、数多くの貴重な近代建築物が残されています。私の現在の主たる仕事はエコノミストとして地元経済の景気判断を行うことですが、県内各地を産業調査で訪れる際に、古い工場や銀行の店舗などの近代建築物を訪問することを楽しみにしています。そうした近代建築物は、単なる審美的な鑑賞の対象ではなく、近代の経済発展の記録をとどめる

遺跡であり、観光の拠点としての機能など、現在の経済活動にも重要なつながりを持つ存在と考えているからです。

### 3. 旧第一別館の保存・改装とぶんか館

そのような見方をしていると、今回の「田中絹代ぶんか館開館」のニュースに若干の違和感を感じてしまいます。ぶんか館の展示内容は良く考えられた素晴らしいものなので、そこにスポットが当たるのは当然なのですが、他方、建物そのものについてはほとんど報道されないからです。

この建物は、1924年（大正13年）に旧逓信省下関電信局電話課庁舎として竣工し、電話局として利用された後、下関市の所有となり、市庁舎第一別館として活用されてきました。その後、1999年に下関市が老朽化を理由に建物の取壊しを決定しましたが、亀山八幡宮宮司の竹中恒彦氏を中心に、これを保存すべきとの市民の声が強まりました。そこで、改めてその歴史的価値が再検討され、修復・保存されることになり、修復後の活用策として田中絹代ぶんか館が作られることになったのです。もし仮に、1999年に建物が取り壊されてしまっていたら、そもそもこのぶんか館が作られることはなかった訳ですから、建物そのものに、もう少し関心を持って頂いて良いのではないかと思います。

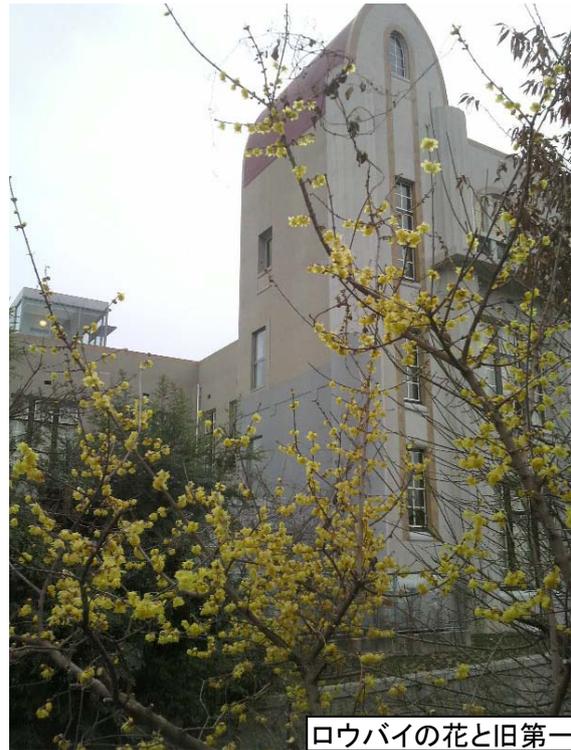
とはいえ、建物の歴史的価値を議論しようとする、何やら専門的でとっつきにくい話が多くなるのも事実です。インターネットでぶんか館のページを見ると、この建物について、「ヨーロッパの新建築運動の影響を受けた若手建築家たちによる『分離派建築会』の建築の要素」を持っていることが貴重だと書かれています。しかし、「分離派建築会」といわれても、よほど建築史に詳しい人でない限りあまりピンときません。

そこで、難しい話は後回しにして、まずはこの建物をどう楽しむかについて、身近なところから考えてみたいと思います。

#### 4. 旧第一別館の楽しみ方

旧第一別館が建っているのは下関市の中心部、市役所のすぐ隣です。この周囲には季節を通じて色とりどりの花が咲き、その姿と香りを楽しむことができます。まずは第一別館の西側、田中川のほとりをゆっくり散歩してみてください。今の季節だと、川を挟んで反対側に、ロウバイの黄色い花が咲いていて、甘い良い香りが楽しめます。その隣のウメの花もちらほらと咲き出し、じきに見頃を迎えることでしょう。その次にはサクラ、その次にはアジサイが控えています。夏になれば、大きなフヨウの株が毎日沢山の花を咲かせ、隣のムクゲと競っています。旧第一別館横の田中川に掛かる弁財天橋のたもとには、エンジェルズ・トランペットの大きな花が鈴なりに咲きます。秋にはケイトウとバラ。冬には夏蜜柑の黄色い実がたわわに実って、赤い屋根とのコントラストが綺麗です。

田中川は水量こそ少ないものの、小魚が下流から上流に川登りする姿を良く見かけます。運がよければ、それを狙った白鷺が旧第一別館を背景に、田中川の河畔を飛び回る姿を見ることができるでしょう。



ロウバイの花と旧第一別館



田中川沿いに咲くフヨウとムクゲ



弁財天橋のたもとに咲くエンジェルズ・トランペット



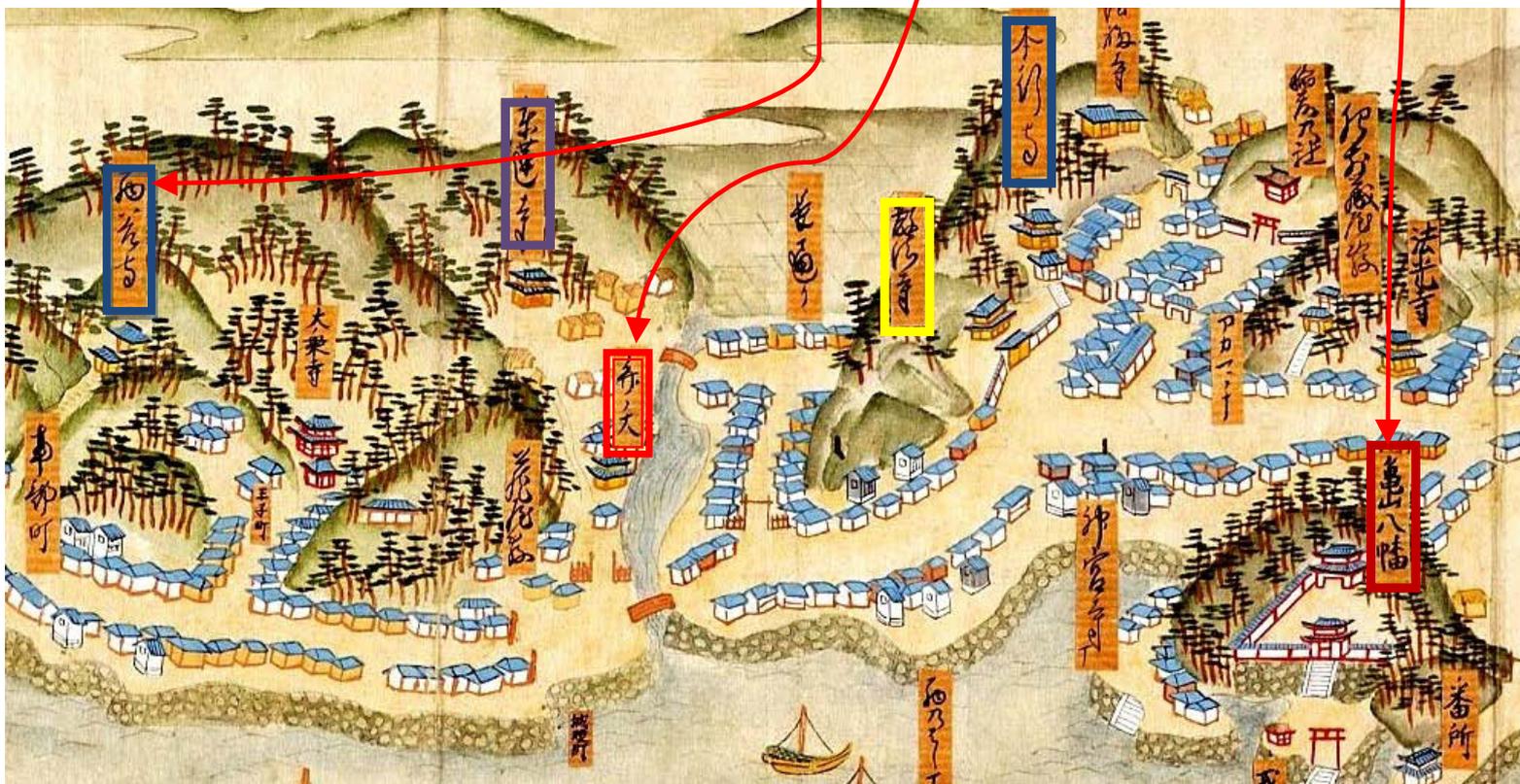
旧第一別館前を飛ぶ白鷺

## 5. 旧第一別館が建っている場所の今昔

ところで、第一別館の隣の橋には、なぜ弁財天（弁才天、弁天）という神様の名前が付いているのでしょうか。調べた限りでは、現在、この付近に弁天様を祭った神社や祠がある訳ではなさそうです。もしかしたら、以前に祠があり、橋の名前にだけ、それが残っているのかも知れません。

東京国立博物館に「長州赤間関之図」という江戸時代の下関の様子を描いた絵図が収蔵されています。この絵図を見ると、田中町付近は、現在よりも海岸線が深く入り込んでおり、田中川の川幅もかなり広がったことが分かります。その田中川のほとり、現在は下関市役所が建っている南部城跡の北側部分に、「弁天」の文字が読み取れます。この表記からみて、江戸時代には、この地に弁天様を祭った祠があったものと考えられます。祠はなくなってしまいましたが、

弁財天という女性の神様の名を冠した橋が残り、橋の欄干には、女流詩人・金子みすゞの詩碑が飾られ、橋のたもとには、女優・田中絹代の顕彰館が建ちました。これもひとつの巡り合わせなのかも知れません。



東京国立博物館収蔵 『長州赤間関之図』

## 6. 金子みすゞと旧第一別館

旧第一別館の建物との関係という意味では、金子みすゞも重要な「顕彰されるべき先人」です。というのは、この旧第一別館と詩人・金子みすゞは、極めて近い時期に、すぐ近い場所で「誕生」しているからです。

金子みすゞは、1903年、現在の長門市仙崎で生まれました。本名は金子テル。高等女学校卒業後、1923年に下関市に移り住みました。当時、下関市西之端町にあった「商品館」という名店街の中の上山文英堂の支店で、店番として働きながら詩作を始め、同年6月頃から、ペンネーム「金子みすゞ」名義で童謡を雑誌に投稿するようになりました。つまり、詩人・金子みすゞが誕生したのは1923年、場所は下関市西之端町の商品館だったと考えられるのです。

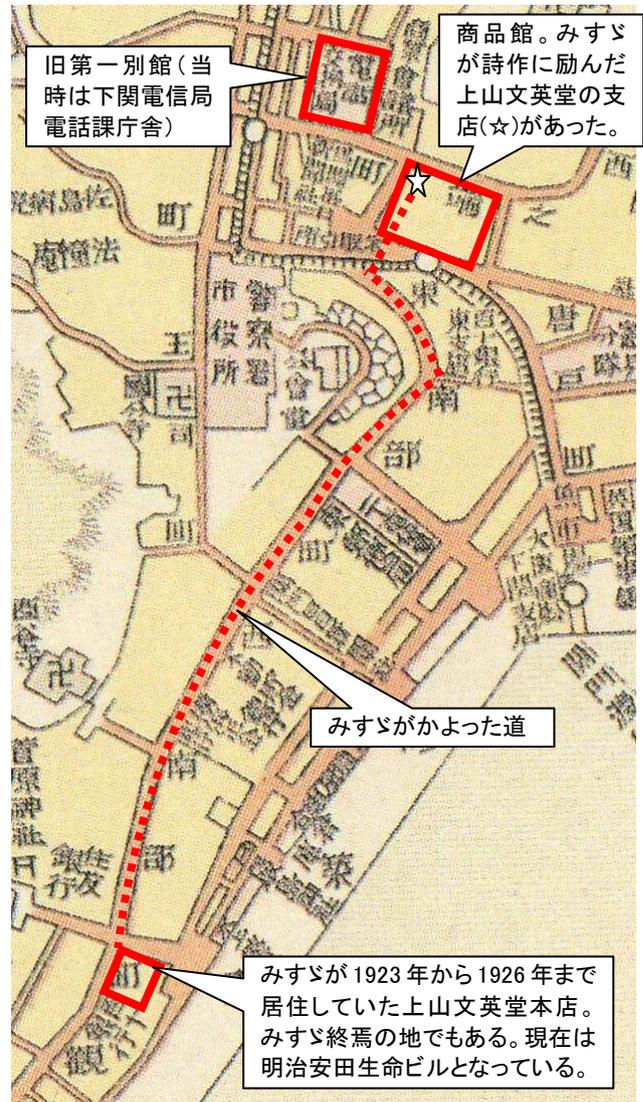
商品館があった場所は旧第一別館と目と鼻の先です。旧第一別館の工期は1922年から1924年でしたから、この建物もまさに同時期に、ほぼ同じ場所で誕生した訳です。

金子みすゞは1926年に結婚し、1930年に下関市西南部町の上山文英堂本店で亡くなりました。商品館で詩作をしていた期間はごく短かったのですが、ちょうどその時期に、電話局の真新しい建物が完成し、みすゞもそれを眺めていたであろうと考えながら旧第一別館を訪れると、感慨深いものがあります。

残念ながら、みすゞが、建築当初のこの建物を眺めてどのような感想を持ったのかは伝わっていません。ただ、今回、改装された旧第一別館のエレベータ3階の外扉には、次のようなみすゞの詩が書かれています。

「ふと思ひ出す、あの町の、  
川のほとりの、赤い屋根、」  
(金子みすゞ全集1「美しい町」より)

このフレーズは、みすゞ自らが編んだ3冊の手書き遺稿集の第1巻の題名でもある有名な詩、「美しい町」の冒頭部分です。この詩の最後で、「川のほとりの、赤い屋根」の建物について、みすゞ自身が、「それは、たれかに借りてみた、御本の挿絵でありました」と種明かしをしています。とはいえ、田中川のほとりに、赤い「かまぼこ型」の屋根を持つ新しい建物が完成した時期と、みすゞの詩作の時期とが重なっているのです。旧第一別館がこの詩のモチーフになったのではないかと想像することは可能でしょう。そういう想像を巡らせながらこの建物を眺めることも、また楽しいものです。



1929年(昭和4年)頃の田中町、南部町界隈の地図  
出典:下関市市史編修委員会、「下関市史・市制施行一終戦」、1983

## 7. 旧第一別館を様々な角度から眺める

さて、そろそろ旧第一別館の建物の構造を見てみましょう。建物の全体像を知るには、様々な角度で遠くから眺めてみるのが有効です。旧第一別館の写真としては、弁財天橋越しに少し離れて撮ったものが良く使われます。普通の西洋建築にはめったに見かけない、赤い「かまぼこ型」の屋根と西側3階の半円形のアーチ窓が目立つ、斬新かつ可愛らしい建物です。この角度は旧第一別館の「横顔」という感じです。

一方、唐戸側から建物南側に接近したときの印象は異なります。赤い屋根と3階部分が見えにくいので、横長の箱に石柱が10本並んだ形が強調されるからです。玄関は南側に付いているので、こちらが「正面を向いた顔」という感じです。石柱が10本も並ぶと、伝統的な西洋建築であれば、かなりいかめしい印象になるのですが、旧第一別館の場合、柱の上が「梁」で覆われていないので、伝統的な西洋建築とは異なり、明るく軽やかな印象を受けます。両端以外の8本の石柱は、円柱を縦に半分に割って壁に貼り付けた形状で、色合いも壁と同じであるため、光線の当たり方だけで壁の模様のようにも見えます。西側3本の石柱の上には薄い梁がみえますが、石柱が梁を突き抜けて上に伸びているので、どの柱も最上部を梁で覆われてはいません。この構造が、旧第一別館の外観の大きな特徴です。

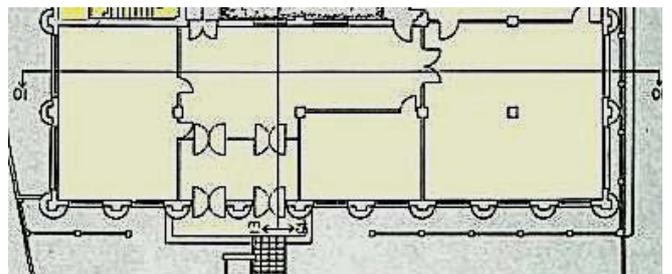
試しに、旧第一別館の写真を用いて、石柱の上部を覆う太い梁のイメージを描き足してみると、いかめしい神殿のような印象の建物になります。これと比較して、実際の旧第一別館は、伝統的な西洋建築の要素である石柱を採用しつつも、いかめしさや堅苦しさを抑えた、軽やかな外観に仕上げられているように感じられます。



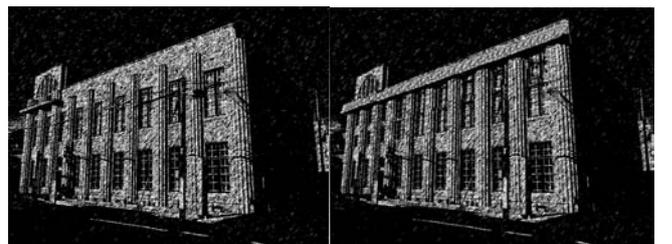
旧第一別館を弁財天橋越しに眺める



旧第一別館の南側を唐戸側から望む



旧第一別館の平面図。柱の断面が半円形なのが分かる。



上の写真をイラストタッチにしたもの（左）と、そこに更に石柱上部を太い梁で覆ったイメージを書き加えたもの（右）

## 8. 伝統的な西洋建築と「分離派建築会」

このように旧第一別館は、伝統的な西洋建築とはかなり異なるイメージの建物ですが、それは「分離派」と呼ばれる近代建築運動の考え方に基づいて設計されているためです。「分離派」について説明するために、まず、普段我々が思い描く「伝統的な西洋建築」の特徴を思い出してみましょう。

欧米の主要都市の多くでは、記念建築物、行政施設、銀行、博物館、美術館等で、太い石柱と梁に装飾が施された、古代の神殿を思わせるような荘厳な建物が立ち並び、都市の景観を形成しています。西洋建築史をひもとけば、古代ギリシア・ローマの神殿等に利用された建築様式が、ルネサンスでの復興や、18世紀の新古典主義建築を通じて発展し、19世紀には過去の様々な建築様式を復古的に用いる「歴史主義建築」が主流になった、とあります。欧米の主要都市で目を引く、威厳ある「伝統的な西洋建築」の多くは、近代になって、鉄やコンクリートなどの新しい素材を使って、伝統的・古典的な建築様式—例えば、柱と梁による建物の基本構造や柱頭の装飾など—を範として造形されたものです。そして、明治期の日本における近代の西洋建築物の多くも、そうした建築手法を移植したものでした。

これに対し、大正期の日本では、明治以来の西洋の伝統的な建築様式の移植が一段落し、欧州における近代建築運動の影響もあって、「様式にとらわれない、設計者の主観性を尊重した建築」という新しい機運が芽生えてきます。こうした中で、1920年(大正9年)に、日本で初めて結成された建築デザイン運動グループが「分離派建築会」です。「分離派」という名称は、「過去建築圏より分離し、総ての建築をして真に意義

あらしめる新建築圏を創造せん」(結成宣言)という趣旨で名付けられたものです。1928年までの9年間に、7回の作品展を開催した後、会としての活動は終了しますが、この運動が日本の建築の近代化に及ぼした影響は高く評価されています。

分離派は、その理念としては、特定の新たな建築様式を作り出すことを志向してはいなかったようですが、実際の分離派の建築物を見ると、いくつかの共通する特徴があります。特に、「半円と放物線の多用」は分かりやすい特徴です。旧第一別館の場合、3階の窓が半円形、塔屋の赤い屋根が放物線です。

ただ、旧第一別館は、典型的な分離派建築ではなく、石柱の利用が歴史主義的であるとの指摘もあります。確かに、上部を梁で覆っていないとはいえ、機能上必須とは思えない石柱をあえて周囲に配したことは、歴史主義的な様式建築の残滓と解することもできるでしょう。この建物の設計者が誰か、という議論とも関連しますが、伝統的な建築から近代建築に移行する過渡期の作品と位置づけることが可能なのかも知れません。

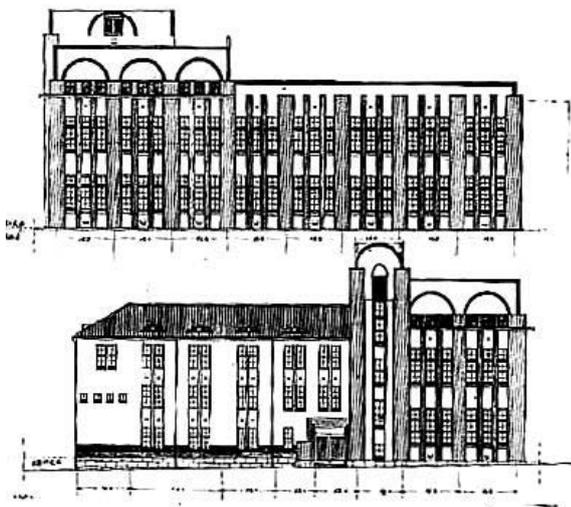
## 9. 旧第一別館の設計者を巡るミステリー

それでは、旧第一別館を設計したのは誰なのでしょう。それは現時点では判明していません。旧逓信省の建物として設計・建築されたので、設計を担当した組織が「逓信省営繕課」であることは分かっています。逓信省営繕課は、当時の日本を代表する設計組織のひとつであり、国内で多数の電話局舎を建築していました。組織的な「モデル設計」によって標準化された、量産型の電話局舎のひとつであるため、設計者の氏名が明確には残されていないのです。

量産型といっても、多数建築された同タイプの局舎の中で、現存しているのはこの建物だけです。この建物の設計者は誰だったのか」ということに関心が集まるのは当然でしょう。当時の逓信省営繕課には、その後有名になる建築家が多数在籍していましたので、その中の誰が旧第一別館の設計者なのかを検討・推理した論文が、いくつか書かれています。

早くからその設計者の候補者として挙げられていたのは、山田守（1894～1966）という逓信省営繕課の技師です。山田は逓信省で数多くの設計を手掛けたほか、分離派建築会の結成メンバーとして分離派作品展に多くの作品を発表していました。山田が候補者として挙げられたのは、彼が1921年の分離派作品展に発表した「ある電話局の草案 1921年」という図面が、旧第一別館ととてもよく似ているからです。ただ、この図面が発表された背景については様々な解釈が可能であり、現時点では、山田が旧第一別館の設計に直接関与したとは言えないという見方が有力なようです。

他にも候補者として名前が挙がっている建築家がありますが、この建築史上のミステリーが、新資料で解き明かされる日がいずれ来るかも知れません。



山田守、「ある電話局の草案 1921年」

## 10. 旧不動貯金銀行下関支店との比較

旧第一別館からほんの2～3分ほど南に歩いたところに、是非比較して見て欲しいもうひとつの建物が建っています。旧不動貯金銀行・下関支店、すなわち現在の中国労働金庫・下関支店です。こちらは現役の金融機関店舗なので中を見学する訳にもいきませんし、ガイドブックにも載ることの少ない、地味な建物です。ただ、両方の建物が建築された経緯を比較すると、なかなか興味深いものがあります。

旧不動貯金銀行も旧第一別館と同じ三階建てで、建物の前面に長い石柱が2本立っています。ところがこちらの石柱は上に梁が乗せられ、縦と横の線が明瞭に出ています。こちらは、ギリシア・ローマ建築からの流れを受け継ぐ、古典主義の建築物で、トスカナ式と呼ばれるオーダー（建築の基本単位となる円柱の形式）を採用しています。「分離派」が否定した様式建築ということになります。



設計を担当したのは関根要太郎（1889～1959）という建築家で、旧不動貯金銀行の店舗を100以上も手掛けた人ですが、その中で現存しているのは下関と京都だけだそうです。ところが、京都七条烏丸通に建つ旧不動貯金銀行京都七条支店は、半円形のアーチ窓を多用した斬新な建物で、どちら

かといえ旧第一別館に似ています。図面に残っているほかの建築を見ても、関根は、銀行らしくない斬新な建物を数多く設計した建築家だったことが分かります。1927年の第6回分離派作品展の出展者リストにも関根の名前が載っており、むしろ元々は「分離派建築会」の側にいた人のようです。その建築家がいれば転向して、1934年（昭和9年）に、この伝統的な西洋建築を、旧第一別館にほど近い場所に建てたというところがとても面白いと思います。流行が去ったのか、あるいは斬新なデザインが受け入れられない世相になっていたのか、その背景を是非知りたいと思います。

### 1.1. 建物内部の意匠について

旧第一別館の外観の話はこれくらいにして、次に、建物内部に入ってみましょう。玄関を入れてすぐに目立つのは、電話交換機の設備搬入のために利用したと思われる穴が、1階天井と2階床面の間に開いていることです（現在は、ガラス板で仕切られています）。2階天井部分には、滑車をつるしたのであろうフックが残っていて、かつてこの建物が「電話局舎」であったことを思い出させます。



2階から設備搬入用の穴を見る



2階天井に残るフック

1階の名誉館長室は、古川薫名誉館長の展示物が置かれた部屋ですが、ここでは天井の中央部に造形された装飾に注目して下

さい。実際の業務に使われてきた建物は、床や壁面下部など、頻繁に利用される部分が建築当初から改造されたり汚れて変質してしまったりすることが多いのですが、天井は変わらずに残っているものです。最近建築されているようなオフィスビルでは、このような装飾を目にすることはありません。近代建築物を訪ねる喜びは、こうした細部の作り込みを鑑賞することにあると思います。ぶんか館を訪れた際には、目より下にある展示物を鑑賞するだけでなく、是非、視線を上を動かして、建物内部の意匠も鑑賞して頂きたいと思います。



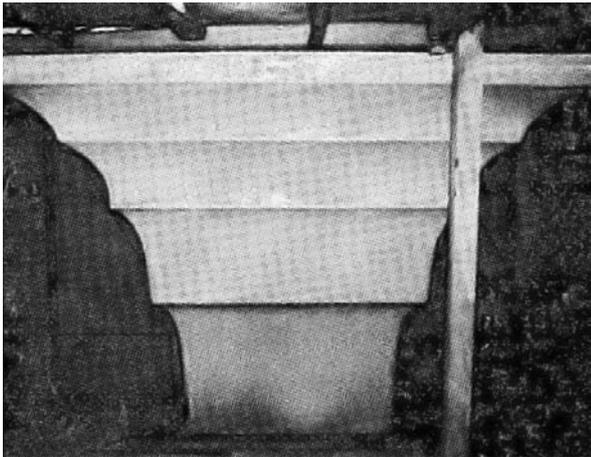
名誉館長室の天井の装飾

次に、2階の「田中絹代コーナー」に上ってみましょう。ここで注目は、漆喰で固めた白い柱の上部で、何層もの豪華な柱頭飾りが天井を支えていることです。円い展示配置の中心に据えられた柱の天井部分で、ライトアップされた装飾が輝いています。



2階「田中絹代コーナー」で見られる豪華な柱頭飾り

建物外観の石柱には柱頭飾りがなく、内部にはあるというのちょっとした不思議な感じがします。この飾り（線型）は、建築当初は表に出ていたものの、その後の改修の際に2階の天井を低くしたために、天井板の裏側に隠れてしまっていました。それが、1994年の調査時に発見され、今回、建築当初の状態に復元されたのです。



天井裏に隠されていた柱頭飾り

出典：小原誠・丹羽和彦、「分離派風局舎」と通信省営繕の建築」、1999

2階の壁面には、他にも独特の装飾が見られます。壁や柱から突き出したひさしや梁を支える部材を「持送り」と呼びますが、この建物の2階の壁面にある持送りは、梁を支えるといった役割を果たしているようには見えません。単なる装飾として配置されたもののようです。



2階壁面に見られる持送りの装飾

建物の3階部分は、半円形のアーチ窓が大きく開いた明るい部屋です。ここは特段の展示物は置かれていないようでしたが、窓そのものが見ごたえのある展示のように感じられました。

建物西側の石造りの階段部分は、いかにも大正期の近代建築らしい重厚な雰囲気がかもしだしています。是非、実際に昇り降りをしてみて下さい。1階から3階までの階段の吹き抜け部分全体に、転落防止のための長い鉄製の格子が取り付けられています。厚い鉄板を使い、縦線に丸をあしらったデザインの格子が室内に取り付けられているのは珍しく、一見の価値があります（ただし、この格子は戦後の改修時に追加されたもののようです）。



建物西側の階段室と鉄製の格子

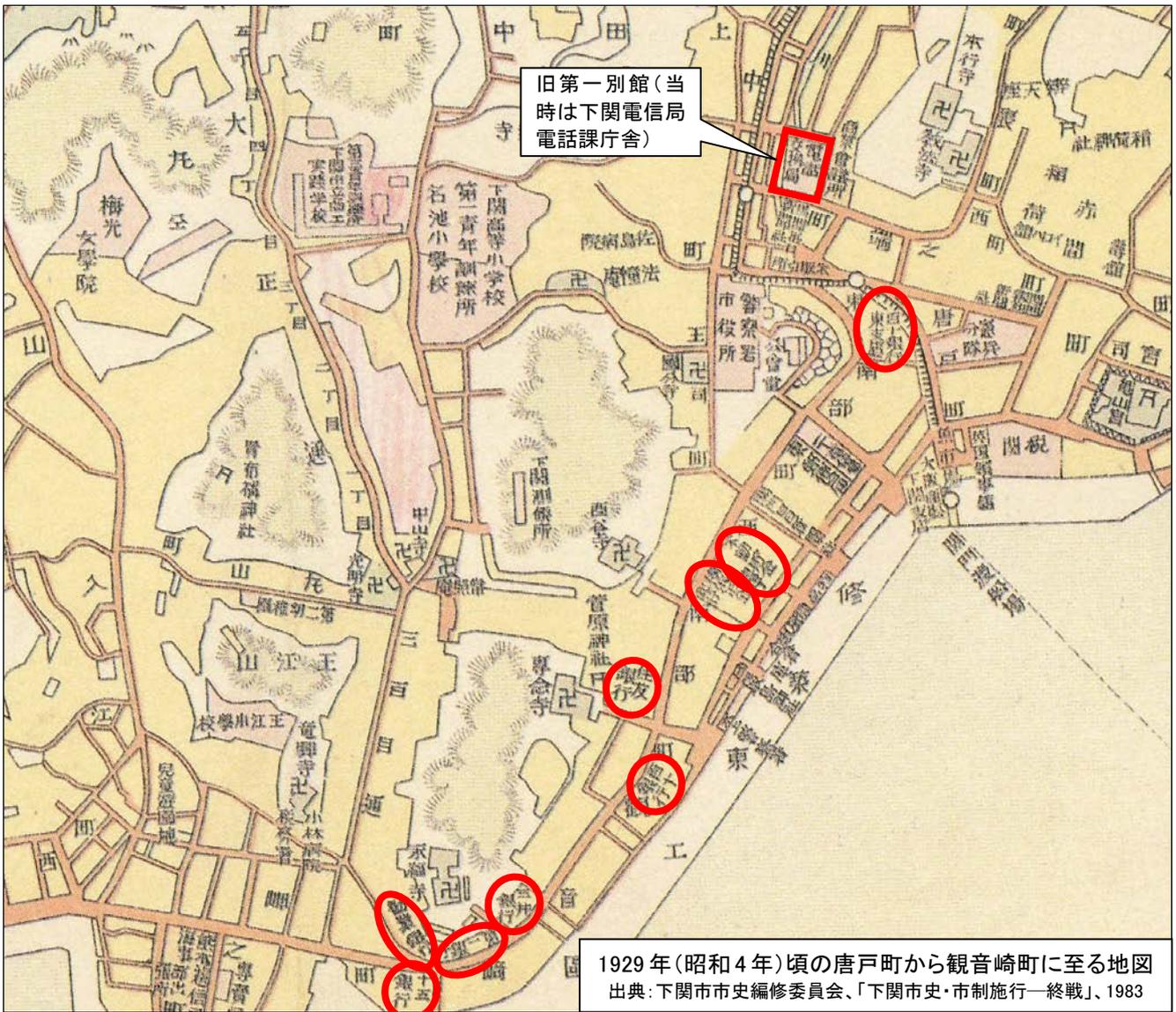
## 12. 当時の下関にあった西のウォール街

現在、労働金庫（旧不動貯金銀行）から南西に中通りを進むと、観音崎町を過ぎるまで、営業している銀行は全くありません。ところが、昭和初期の地図を広げてみると、この界隈に8つの銀行の店舗が集中していたことがわかります。僅か600メートルの区間に、不動貯金銀行、横浜正金銀行、住友銀行、百十銀行、三井銀行、第一銀行、勸業銀行、十五銀行と並んでいます。このうち、不動貯金銀行と三井銀行の建物だけが現在も残っています。旧三井銀行下関支店は、その後、山口銀行本店となり、現在はやまぎん史料館として、修復・公開され

ています。

昭和初期の地方都市で、これだけ銀行が一ヶ所に集中することは珍しいので、この地を「西のウォール街」と呼ぶ人もいます。当時、下関の経済がいかに発展していたかがわかります。ただし、これらの銀行が下関に進出したのは実はそれほど早くはなくて、ほとんどが大正期の進出なのです。

交通の要衝に位置する下関（かつては赤間関）の経済は、歴史的にみると大きな浮沈を経験してきました。江戸時代後期には北前航路における国内貿易の中継地として下関は大いに栄えましたが、明治に入ると汽車・汽船が実用化されて流通経路が変化



し、物品問屋が衰退して下関の経済も衰えました。

その下関が再度繁栄するのは大正期です。日清・日露戦争を通じて大陸への足がかりをつかんだわが国は、1914年（大正3年）の第一次世界大戦によって経済情勢が好転し、とりわけ下関は大陸貿易の拠点として大きく発展しました。「本州の最西端」という立場から、「大陸への玄関口」という立場に変わったのです。その繁栄する下関に、全国規模の銀行の支店開設が相次いだのが大正期でした。大正期から昭和初期というごく短い期間に、立派な銀行の建物の建築が相次ぎ、西のウォール街が出現したのです。

この時期には、銀行だけではなく、商社や公的機関も立派な建物を建築しました。大陸への玄関口として発展する下関の街にふさわしい建物を建てようという思いが、当地に沢山の近代建築物をもたらしたのです。旧第一別館も、そのひとつです。

戦後、わが国は大陸との交流が細り、下関は「玄関口」から再び「最西端」の立場に変わりました。西のウォール街も消え、やまぎん史料館と旧不動貯金銀行・下関支店という、2つの近代建築物を残すだけになりました。

しかし、2008年のリーマン・ショック以降、世界の成長の中心は欧米からアジア、特に中国にシフトしています。現在、山口県の経済が、素材産業の生産と輸出を中心に持ち直しつつあるのは、山口県が中国・韓国に近いという地理的な理由も大きいと考えられます。その意味では、下関が再び「最西端」から「玄関口」に変わりつつあるのではないかと、いうことを、近代建築物の歴史を通じて感じ取ることができるのです。

### 13. 再び日銀本店旧館について

最初に触れた日銀本店旧館の建物は、この下関といくつかのかかわりがあります。1893年に、この建物の建築事務主任が、日銀支店長として下関に転勤してきました。この人物が、後に日銀総裁、内閣総理大臣などを歴任する高橋是清です。下関には3年間勤務して東京に戻っていますが、当時の下関の様子を「高橋是清自伝」に書き残しているため、我々は当時の下関の姿を詳しく知ることができます。同時に、彼が自伝に書き残した記録によって、日銀本店旧館がどのように建築されたかも分かるのです。

もうひとつのかかわりは、長野宇平治という建築家を通してです。日銀本店旧館を設計したのは辰野金吾、明治・大正期における日本の西洋建築の開祖ともいうべき人です。ただ、日銀本店は、辰野金吾の死後、1923年の関東大震災の際に火災で半焼してしまいます。その後、取り壊して建て替えてはという話になりましたが、やはり従前のまま残し、周囲に建物を増築、改修することになりました。1927年から、この改修工事を担当したのが、辰野金吾の愛弟子、長野宇平治だったのです。長野は恩師の傑作建築物を蘇らせるために全精力を傾けました。現在の日銀本店旧館は、むしろこの時の長野の作品と呼んでもおかしくないと言評する人もいます。

そして、下関においては、長野は、1919年に三井銀行・下関支店（後の山口銀行本店、現在はやまぎん史料館）を設計した建築家として知られています。下関を代表する歴史的な近代建築物の設計者が、日銀本店旧館の再生に、深くかかわっていたのです。

#### 14. 近代建築物の保存と活用について

現在は国の重要文化財に指定され、「明治を代表する洋風建築」と評される日銀本店旧館ですら、かつては取壊しが検討されたことがありました。旧第一別館も、取壊しの危機を乗り越えて今日を迎えました。その時々を経済合理性による判断と、長い歴史の中での判断とが食い違うことは良くあることです。無制限に古いものを残しておくことはできませんが、歴史が多くのかたちを教えてくれるように、歴史的建築物が教えてくれることも多いと思います。

下関だけではなく、山口県内には、様々な歴史的建築物が保存されています。我々は、保存すべき建築物を保存し、適切に活用していくことで、多くのことが学べるのではないのでしょうか。

今回、旧第一別館の修復プロジェクトが無事完了し、下関市民の財産として蘇ったことを心からお祝いするとともに、この事業に携わったすべての関係者の方々に敬意を表します。

ご清聴をどうもありがとうございました。

以上

#### 【参考】山口県内の歴史的な銀行建築

やまぎん史料館(旧山口銀行本店)



旧宇部銀行本店



旧周防銀行本店



山口銀行・錦帯橋支店



#### 【参考文献】

- 小原誠・丹羽和彦、「「分離派風局舎」と逋信省営繕の建築—大正後期の逋信省建築に関する研究 その 2—」、  
日本建築学会計画系論文集 第 516 号、pp. 257-264、1999 年
- 金子みすゞ、『美しい町』、新装版 金子みすゞ全集・I、JULA 出版局、1984 年
- 菊地潤、「分離派建築会各作品展 出展作品資料」、2009 年
- 北井裕子・木村直人、『東京建物物語』、榎出版社、2008 年
- 下関市市史編修委員会、『下関市史・市制施行—終戦』、1983 年
- 下関市役所第一別館のページ、<http://www.geocities.jp/tarasuko33/bekkan.htm>
- 下関市立近代先人顕彰館（田中絹代ぶんか館）ホームページ、<http://kinuyo-bunka.jp/>
- 関根要太郎研究室@はこだて、<http://fkaidofudo.exblog.jp/>
- 高橋是清、『高橋是清自伝』（中公文庫版）、中央公論新社、1976 年
- 東京国立博物館ホームページ、<http://www.tnm.go.jp/>
- 日本銀行百年史編纂委員会、『日本銀行職場百年』、1982 年
- 分離派建築博物館・・・JAPANESE 1920's ARCHITECTURE・・・、<http://www.sainet.or.jp/~junkk/>
- 矢崎節夫、『童謡詩人 金子みすゞの生涯』、JULA 出版局、1993 年